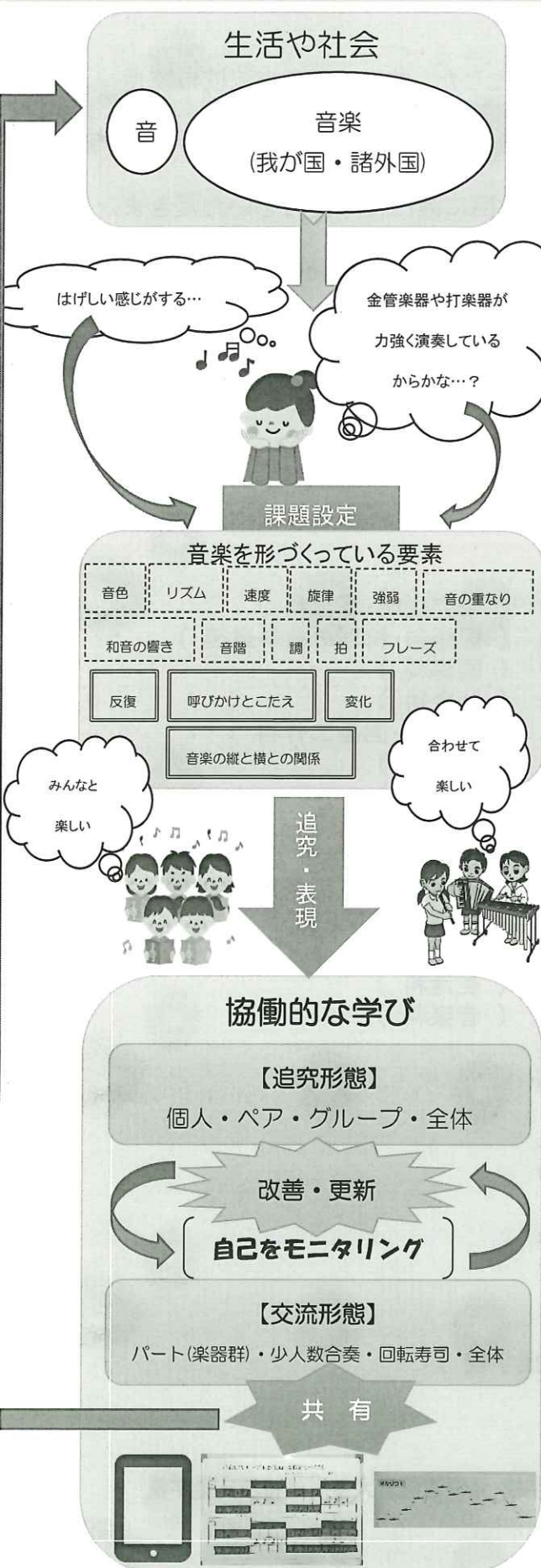




子供が学びをつくる 音楽

音楽科の目指す「自らの学びをメタ認知」しながら学び続ける子供	
課題設定	<p>生活や社会の中に存在する様々な音や音楽に対して、音楽に対する感性を働かせて演奏したり聴いたりしようとする。その際、楽曲全体を聴く中で、楽曲固有の特徴に気づき、音楽を形づくっている要素を見つけようとする。</p> <p>(1) 生活や社会の中に存在する様々な音や音楽に対して、音楽に対する感性を働かせて演奏したり聴いたりしようとする。</p> <p>① 子供の生活や、子供が生活を営む社会の中には、様々な音や音楽が存在し、生活に影響を与えている。子供は学習の見通しを持ち、音楽活動に取り組もうとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音や音楽が生み出すよさや面白さ、美しさを自ら感じ取ろうとする。 既習内容や前時までの学習内容との関連を見出そうとする。 <p>(2) 自ら、音楽を形づくっている要素に気づき、活動のイメージをもつ。 ※手がかりになるのは〔共通事項〕に示す「音楽を形づくっている要素」である。</p> <p>① 常時活動において「音楽を形づくっている要素」の働きを認識</p> <p>② 表現を工夫したり感受したりするための課題キーワード（「音楽を形づくっている要素」）を設定。</p>
課題追究	<p>課題を解決する際に、追究形態、追究方法を選択し、協働的に追究する。また、客観的な視座を高めるための交流形態を活用し、他者との対話を重ねながら改善や更新を重ねる。</p> <p>(1) 課題を解決する際に、追究形態、追究方法を選択し、協働的に追究する。</p> <p>① 課題解決の追究形態の選択</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人追究、ペア追究、グループ追究、全体追究 <p>② 音楽科固有の追究方法の選択</p> <ul style="list-style-type: none"> (拡大)楽譜にパート別に色分けしたり、音楽用語を書き込んだりして整理する。 声や楽器、身体表現などで表現する。 <p>(2) 客観的な視座を高めるための交流形態を活用し、他者との対話を重ねながら修正や更新を重ねる。</p> <p>① 課題解決に向けた交流形態の選択と活用</p> <ul style="list-style-type: none"> パート(楽器群)ごとの学び合い、少人数の合奏形式での学び合い、回転寿司交流、全体 <p>② 対話の必要感を実感</p> <ul style="list-style-type: none"> 思いや意図を言葉や音楽で伝え合う学習内容に応じて、音楽科の特質を生かした音や音楽、言葉や呼吸、身体表現などを通じた対話の意義に気付く。
パフォーマンス	<p>追究結果を既習の表現方法から選択して表現する。そして、瞬間芸術と言われる音楽を可視化したり再生可能なものとしたりして整理する。</p> <p>(1) 追究結果を既習の表現方法から選択して表現する。</p> <p>① 音楽科固有の表現方法を選択して表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽の言葉（「音楽を形づくっている要素」や曲想を表す言葉） 音符、休符、記号や用語 演奏 図形楽譜 <p>② 表現媒体の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 表現内容に応じた媒体の選択（拡大)楽譜、ホワイトボード、ワークシート、iPad等） <p>(2) 瞬間芸術と言われる音楽を可視化したり再生可能なものとしたりして整理する。</p> <p>① ICT（録音機器、タブレット等）を活用して何度も音や音楽を聴いたり映像で確かめたりして、表現のよさや面白さなど感じ取ったことを他者と共有する。それを次の題材や個の表現につなげる。</p>

～自己を見つめ、学びの主体者となる子供～



目指す姿を実現する支援例

【音や音楽に耳を傾け、その働きについて気付けるよう支援する】

- ・ 「音楽を形づくっている要素」の中からねらいを定めた常時活動を積み重ねることにより、その効果や働きについての認識を促す。
- ・ 題材や本時の学習内容に対して、音楽科の既習経験から〔共通事項〕や「音楽を形づくっている要素」を見出すよう促す。それが課題追究及びパフォーマンスの柱として設定されることになる。

【子供が学習の見通しをもてるよう支援する】

- ・ 題材や本時の学びが自覚できるよう、ワークシートの工夫により思考の整理及び理解を促す。毎時間の振り返りから次時の課題設定にもつなげられるよう促す。

【個の追究をもとに協働的な学びを支援する】

- ・ 「協働的な学び」とは、集団での音楽活動が中心となる音楽科の学びの特質である。そのため、協働的に追究する場面を意図的に設ける。しかし、その根底には個人で追究したものが必要不可欠となる。個人追究と様々な追究形態とのバランスを教師がコーディネートする。
- ・ 予め音楽科の特質を生かした様々な追究方法を構築し、その中から選択するよう促す。

【他者意識を持ち、客観的な視座を高めるよう支援する】

- ・ 予め子供と教師で交流形態を構築しておき、必要に応じて選択して活用するよう促す。その際、選択の指針になるように、何をモニタリングするための交流なのかという目的を共通理解しておく。
- ・ 自ら感じ取ったものを修正・更新し、さらに楽曲への思いを深められるよう、他者と相違点を比較しながら演奏したり感じ取ったりするよう促す。

【自力追究結果を子供が表現できるよう支援する】

- ・ 自力追究の過程や結果を他者に伝えるために、表現方法の幅を広げておき、課題に応じて自ら選択できるよう促す。
- ・ 瞬間芸術と言われる音楽は、可視化された楽譜によって再び演奏可能なものとなり、他者と感じ取ったことを共有することができる。そのため、音符や音楽用語はもちろん、図形を用いた図形楽譜などを題材及び本時の課題に応じて活用できるよう促す。

【表現の多様性を認識し、共有化できるよう支援する】

- ・ 他者の音楽表現のよさを見つめることは、自己の音楽表現の幅を広げることにつながる。他者の思いや意図を理解し、そのよさを見つけられるよう、ICTを活用して瞬時に振り返り共有化できるよう促す。
- ・ 必要に応じて、教師の範奏や指揮により表現意図の焦点化を図る。